

開催地名	愛知県豊明市
開催日時	令和7年9月6日(土) 13:30～15:00
開催場所	豊明市文化会館 小ホール
語り部	山田 修生(宮城県仙台市)
参加者	区長、自主防災会、消防団、町内会、その他一般 120名
開催経緯	今後の大震災に備え、防災についての知識を深めるため
内容	<p>講演のテーマ「マグニチュード9.0の脅威～大地震への備えを～」</p> <p>(1) 地震の規模について</p> <p>14年前の東日本大震災はマグニチュード9.0だが、南海トラフ地震は想定でマグニチュード9.1とされており、わずか0.1の違いでもエネルギーは約1.4倍の差があり、南海トラフの方が大きな規模になる。</p> <p>(2) 東日本大震災の体験</p> <p>東日本大震災では、震源域が縦500km、横200km、海底6,500mという広大な範囲が一度に動いたことがわかる。その結果、岩手県では30メートルを超える津波が発生した。「千年に一度の地震」と言われたが、実際には869年の貞観地震と同規模であり、歴史的に地震は繰り返していることがわかる。</p> <p>その後、昭和53年の宮城沖地震ではブロック塀倒壊による死亡事故が起こり、防災への社会的取り組みが本格化した。以来、講師自身も47年間、自然災害現場の視察等を通し学び続けてきた。</p> <p>(3) 前震・本震・余震の重要性</p> <p>地震には前震、本震、余震があり、前震は後になってわかることが多く、本震後の余震も危険である。東日本大震災では本震の約1か月後にマグニチュード7.2の余震が発生、本震により、弱った建物の被害をさらに大きくした。余震は10年間で1万4千回も観測され、気象庁は「今後1か月は要注意」と発表するが、これは経験則に基づく正しい警告である。</p> <p>(4) 自宅避難所の確保</p>

災害時に守るべきは自分と家族の命であり、地域全体を守ることは大事だが、ときとして、困難な場合がある。そこで、可能であれば自宅の中で命を守れる部屋を一つ確保し、家具や物をなるべく置かず、置くにしても整理して、上から倒れてくるものが当たらないように配置することが重要。

特に夜間に地震が発生した場合に備え、安全確保のスペースが推奨される。建物の耐震性も確認が必要で、昭和 56 年以降の建物は新耐震基準に基づいているが、それ以前の建物は補強やリフォームを検討することが望ましい。また、避難用バッグには靴を入れておくことを推奨している。メインブレーカーを切ることも通電火災予防として忘れてはならない点である。

(5) 震災時の体験談

東日本大震災発生時はたまたま自宅で書類の整理をしていた。本震の直前に震度 3～4 の横揺れ、その後、凄まじい縦揺れ・横揺れ・斜め揺れが入り混じり、体が自由に動かないほどの揺れとともに、地下で何かしら大きなものが暴れたかのような五体を貫くような地響き。揺れが収まったと思ったら再び揺れる状態が続き、その都度両手両足を固定していないと、ふっとばされる状況が続いた。その後、私は家族の安否確認を行うことしかできなかつたものである。

住んでいたマンションは、事後の被害判定では全壊であった。震災後、阿鼻叫喚の状況を呈しており、この時間帯のマンション居住者の女性は半狂乱の状態。マンション上部からスピーカーで、可能な方は外の駐車場にお集まりください「安心してください、これから防災士の私の言うとおりに動いてください。心配しないでください」と声をかけることで少し落ち着くことができたようだ。こうした状況下では、大きな声で「大丈夫」と伝えることが人を安心させる重要な手段となるものである。

(6) 建物の倒壊と津波の恐ろしさ

本日の開催地である御地は津波被害のない地域なので、ここでは、津波被害の一端のみ紹介します。新築の一軒家がそのままの形で 20 メートル流された事例があり、津波の力の凄まじさを示している。一級建築士も「これは普通の風や地震の力ではなく、やはり津波の力だ」と言っていた。海岸沿いの松の木もすべて流され、建物や車も壊された。津波の恐ろしさは想像以上である。

だからこそ、防災ではまず自分の命、家族の命を守ることが最優先なのである。

(7) 避難訓練の重要性

災害というのは予定通りに起こらないため、個人・家族単位での準備が重要である。要支援者の避難は近隣住民の協力が不可欠であり、女性だけの避難訓練も極めて重要になっています。避難所運営ではトイレ・キッチン・バス（T・K・B）の確保が重要で、避難者が来てから48時間以内に使える状態にする必要がある。また中学生でも避難所運営を手伝える仙台市では、運動部の生徒たちが協力してトイレを組み立ててくれたこともある。

(8) 大雨・水害への対応

平成12年、東海三県で計500mmの降雨があった名古屋市は、巨大な地下タンクを作っていたものの当時の水が収まりきらず、庄内川や新川が氾濫した。その時も現場に出向き知事と状況の確認をし、かつて河川の改修によって被害を最小限に抑えた。こうした即応と判断が重要である。

(9) 災害時の通信手段

災害時の通信手段については、携帯電話やスマホは震災直後には利用できないことが多く『災害用伝言ダイヤルや公衆電話、避難所の有線電話・防災無線など』複数の手段を準備することが大切である。

(10) 南海トラフ巨大地震への備え

国の調査によると、直接的な死者が約29万人、二次災害で5万2千人に達する可能性があるとして、従来の3日分の備蓄では不足の可能性が大いにある。そのために、具体的にすべきことは2点。

1. 最低1週間分の食料・水・必需品を自宅に備蓄しておく

食料も大事ですが水の備蓄は特に重要です。災害時は給水車も長蛇の列ですぐには水が手に入らないため、自宅で十分な水を確保しておくことが必要。

2. 避難ルート・避難場所を家族で確認しておく

頑丈な建物や地域の避難所、会社・事業所の協力先など、いざという時のために集まる場所を家族で決めておく。避難時に何を持って行くかを決めてリュックやカバンにまとめておき、家族で役割を話し合っておくことが必要。

(11) 個別避難の考え方

自治会や町内会単位での集合避難については、実際には避難所まで行けない場合もあり、まずは近くの安全な場所へ避難することが最優先、自分で安全を確保する行動を取ることが必要。完璧に準備をしても、災害時に何も役に立てない状況になる可能性もある。重要なのは、皆さん自身が自分や家族の命を守るための行動を考え、作り上げていくことである。



開催地より

色々考えながら、地域にあった防災を考えたいと思います。
貴重なお話をありがとうございました。